



# 『遊びを通して、友達との関わりを 深めるための、指導者・保育者の視点や、 適切な関わり方を考える』



常磐会短期大学 教授 <sup>しめだ しんいちろう</sup> 卜田 真一郎 さん

社会福祉法人美咲会 あすか保育園 園長 <sup>とよかわ</sup> 豊川 まや さん

人権保育専門講座では、今年度も専門性を高める研修として、連続講座を開催しています。第3回は12月10日にあすか保育園 園長の豊川まやさんをゲストスピーカーにお招きし、多様な個性をもった集団のなかでの「たてわり保育」の実践を中心にお話いただきました。

## 3・4・5歳児のたてわり保育(異年齢児保育)

園での子どもたちは、素直で真面目な一方、自分の思いをうまく表現できないところがありました。また、自分で考えて判断する力が弱いという姿がありました。人とかかわる力や目標に向かって粘り強く取り組む力などの「非認知能力」を育むためには、性・国籍・文化・宗教・年齢・障がいの有無・考え方などの多様な個性をもった集団のなかで、保育を行うことが必要であると判断しました。昔は地域のコミュニティにおいて異年齢の集団のなかで遊ぶことで自然にかかわる力が培われてきましたが、現在はそれが難しい状況にあります。そこで、2020年から同年齢より多様な集団のなかで育つことで、必要な力を身につけさせたいと考え「たてわり保育」を行いました。はじめは、年齢を超えたかかわりや言葉のやり取りが少なく、集団全体での活動に面白みを感じられない子どももいました。

## 「遊ぶこと」を中心に据えた実践

遊びのなかで、遊具に寝そべったまま言うことを聞かない5歳児のA児がいました。保育者がまわりの子どもたちに「どうしたらいい?」と聞くと、子どもたちから「よけていく」という返事がありました。私たちは、この保育者の言葉に「よけて通ってね」という思いが隠れていなかったか、問い直しました。また、A児がどうしたいと思っていたのか、本当に理解しようとしていたかをふり返りました。

ふり返りから、A児は寝そべるという姿で、この遊びに気が乗らないことを表現しているのだと捉え、5歳児の姿を丁寧に見て、5歳児に育みたい力をもう一度、確認しました。そして、5歳児だけで集まる時間をとり、楽しめる遊びや太鼓演奏などの挑戦する遊びに取り組み、リーダーの経験を積む時間をつくりました。そうすることで、子どもたちは自信をつけ、例えば5歳児が3・4歳児に「大丈夫?」と声をかけたり、一緒に遊具で遊んだりするようになり、遊び方を教える姿が見られるようになりました。その姿を見て、3・4歳児も5歳児の真似をするようになりました。他にも、トラブルが起こったときに5歳児が仲立ちし、子どもたちだけで解決していく姿も見られるようになりました。

## 実践をとおした保育者の変化

遊びを中心とした実践のなかで、保育者の視点や子どもたちへのかかわりが変わっていきました。保育者は子どものありのままを受け止め、じっくり向き合うようになりました。また、子どもの行動の表面に表れる姿だけでなく、内面にある思いを子どもの目線で理解しようとする中で、その思いを肯定的に受け止めることを意識するようになりました。

## 卜田さんのまとめ

子どもは信頼できるおとながいて、安心できる居場所があること、受け入れてくれる存在がいることが大切です。あすか保育園の実践の注目したいところは、子どもたちが表す様々な姿や言葉を受け止め、本気で向き合おうとしているところにあります。保育者は子どもの側に立ち、子どもが表現する姿の背景にある家庭の状況や地域の現状、社会にある矛盾や偏見、差別等も含めて、子どもや保護者のことを捉え、子どもが抱える人権課題をつかむことが大切になってきます。

## 【参加者アンケートより】

- 運動遊びの事例から、「自分ならどのように声をかけていたかな?」ということや、保育者自身の価値観、考え方がふとした時に出るということを考えました。自分のなかでは通り過ぎていくことかもしれませんが、そういう一言ひとことが子どもたちの価値観に影響していくということを改めて感じました。

